

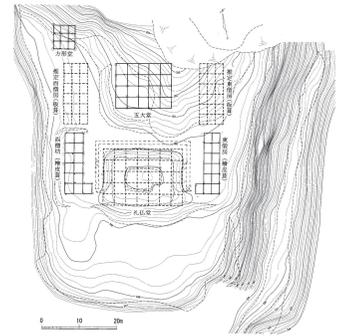
1 クラブ活動と安祥寺上寺跡の調査

筆者と考古研との関係は、京都市埋蔵文化財調査センター在職中、二〇〇一年度の後期授業から公務が休みの土曜日に、非常勤講師として考古学の授業を担当することになった。

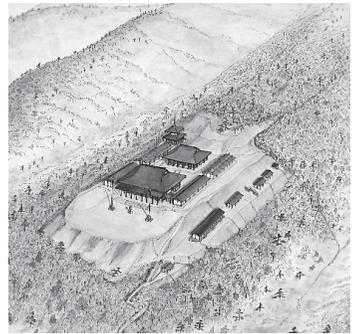
暫くして考古研の部員から、考古学を直接指導する教員が不在で部活の指導をして欲しいとの要望があった。しかし、非常勤講師の立場で、また公務も多忙なため当初は断っていたが、熱心な部員たちからの懇願を受け、二〇〇二年の春から部活の指導を始め、現在まで続けている。

部活で彼女たちと最初に行った遺跡調査は、それまで筆者が個人的に職場仲間と共に調査を進めていた山科区北方山中に残る安祥寺上寺跡^③で、遺跡は安祥寺山の標高三五〇メートル程の山腹尾根上にあり、遺跡へ至るまともな道も無く、谷下から急斜面に張ったロープを使って攀じ登らないとアクセスできない大変厳しい場所にある遺跡であった。そんな悪条件の場所に残る遺跡であったが、彼女たちは積極的にその調査に挑んでくれた。

安祥寺とは、平安時代前期に仁明天皇女御で文徳天皇生母である藤原順子（八〇九〜八七二）が発願し、入唐僧の恵運（七九八〜八六九）を開基として嘉祥元年（八四八）八月に創建された真言系の密教寺院で、山腹尾根上にある上寺（山林寺院）と山裾の下寺からなり、これまでの研究成果から上寺が先行して創建されたと考えられている。⁽⁴⁾ この寺に関しては『三代実録』のほか、恵運が勘録した資財帳の写しが伝わり、寺歴や上・下寺にあった堂宇や仏像ほか仏具、寺領など



安祥寺上寺跡の地形と建物復元図



安祥寺上寺想像復元図(南東から)

も詳しく書かれ、調査を目指した上寺には、礼仏堂、五大堂、僧房、庫頭、浴堂院などの堂宇があったことが書かれている。また、資財帳には、斉衡三年（八五六）十月、願主の太皇太后（藤原順子）が山五十町を買って上げて安祥寺（上寺）に施した記録に寺域の四至が記されており、そこには寺の北限は檜尾古寺所と書かれ、上寺北方山中には檜尾古寺と称する寺院があったことが分かる。

この天皇家の創建にかかる安祥寺上寺は、中世以降には廃絶し、さらには下寺は江戸時代に境内地を毘沙門堂に割譲され、現在地（山科区御陵平林町）へ移転して現存するが、下寺が元あった場所は現在も不明のままである。⁽⁵⁾

上寺跡は、一九八一年に京都国博物館により測量調査が行われ、礼仏堂跡・五大堂跡が確認されていたが、その他の堂宇跡は不明であったため、筆者が一九八五年頃から個人的に遺跡調査を進めていた。⁽⁷⁾

二〇〇二年の夏からクラブ活動で調査を開始することにしたが、上寺跡へはまともな道も無く、雑木で先の見えない薄暗い山中、トイレや休憩施設もない最悪の条件下、当初は女子学生たちでは調査を行う



2002年の上寺跡の調査



急斜面はロープを伝って登る

れることになり、これまでにも多くの学術報告書が出版され、講演会も開催されるなど歴史研究の上からも大きな成果となった。

のは無理と思っていた。

しかし、彼女たちは果敢にも急斜面を重い測量器材を担いでロープを伝って攀じ登り、雑草や雑木をかき分けて探索棒を地面に突き差し、建物跡を示す礎石探しに汗を流してくれた。

その結果、地表直下で礎石が次々と見つかり、建物跡が良好に残存していることが判明した。

その成果を畏友の京都大学大学院文学部の上原真人教授(当時)に伝え、教授の努力で二〇〇二年度京都大学COE研究テーマの一つに選ばれ、同大学の鎌田元一教授ほか多くの先生方の協力を得て、本格的に安祥寺の調査研究が可能となった。

二〇〇二年十二月から翌年一月にかけて、京都大学・京都府立大学・花園大学・京都女子大学の学生たちや、各大学の教員らが調査に加わり、上寺跡の測量調査が行われた。

その後、京都大学が中心となって山裾に現存する安祥寺の建築や仏像など什宝を含めて、考古、建築、歴史、美術工芸(彫刻)、国際交流など、それぞれ専門分野の教授陣が参画して学際的な調査研究が進めら

その過程では、京都大学文学部陳列館の会議室において、学外の専門分野の先生方も含めて何回かの研究会が開催されたが、一般の学生も参加を許され、わが考古研の学生たちも熱心に話を聴講し多くを学んでくれた。

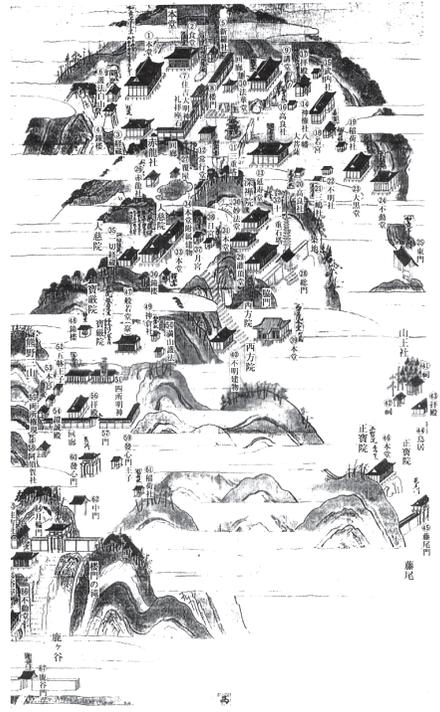
2 檜尾古寺跡の調査

(1) 発見経緯

その後の部活動は、大学の近くにある清閑寺旧境内や阿弥陀ヶ峰城跡のほか、洛北の江文寺跡や静原城跡など、夏合宿を通して測量調査を進めてきたが、二〇一七年から、改めて安祥寺上寺跡の北方にある如意ヶ嶽山中に残る大規模な山林寺院である如意寺跡の調査に挑むことになった。

如意寺は園城寺(三井寺)の別院で、筆者が一九八五年から個人的に調査し、解明を進めてきた遺跡¹⁰⁾である。創建は平安時代中期頃とみられ戦国期には廃絶したが、山中に点在する堂塔社殿を詳細に描いた園城寺所蔵の『園城寺境内古図』『如意寺幅』(重要文化財、南北朝期以下「古絵図」という)が伝わり、この古絵図や文献史料を頼りに数年かけて広範な山中の遺跡探索を行い、東西約二・五キロメートル、南北約一・〇キロメートルの範囲に点在する本堂跡や複数の子院跡など、遺跡の全容をほぼ明らかにすることができた。

しかし、この調査で発見した子院のひとつである大慈院跡推定地は、他の寺院との位置関係や地形上からも古絵図に描かれた場所であったが、古絵図と比べて遺跡の規模が大きく、付近から発見される遺物も平安時代前期のものがあり、大慈院に先行する別の寺院があった可能



『園城寺境内古図』「如意寺幅」(加筆修正図)

性が出てきた。さらに、この遺跡は、安祥寺上寺の北方約六〇〇メートルに位置し、先述の恵運が勘録した資財帳記載の「北限檜尾古寺所」の跡である可能性が高いことが判明、その証拠を掴みたいと考えていたが、当時は公務が多忙で、調査は暫くの間は手付かずの状態となった。

二〇一〇年に京都市の文化財保護課を最後に定年退職して以降、改めて考古研の部員らとこの遺跡を中心に踏査を続け、遺跡の下方の谷から緑釉陶器や灰釉陶器、軒平瓦など平安時代前期の遺物を表採し、古絵図に描かれた大慈院(鎌倉く室町)とは時代が符合しないことが明らかとなった。

さらに二〇一七年には、山中に鹿が繁殖して増えたことから、遺跡上に生えていた雑草を食べ尽くし、それまで隠れていた礎石が地表に現れた。その結果、過去の調査で礎石を一個しか見つけていない場所から複数の礎石が残存するのを確認し、堂宇跡の存在が明らかになっ



遺跡の測量と礎石の探査



建物跡Aでの調査最終日



部員たち手作りの夕飯

たことから、改めて部員たちと一緒にこの遺跡に的を絞って調査を行うことになった。

二〇一七〜二〇一九年の夏合宿(各二泊三日)は、遺跡に最も近い場所、比叡平の南外れの山中にある池の谷地蔵にお願いし、住職の藪康栄さんのご厚意で、客殿を学生たちの宿舍として無償で提供していただけることになった。入浴を始め食事は台所を借りて交代で自炊しながら、朝からすぐに現場へ出かけることが可能となり、調査を効率よく進めることができた。

調査は、夏合宿以外でも休祝日を利用し、考古研OGの大学院生四人のほか、京都市文化財保護課の技師や(公財)京都市埋蔵文化財研究所の調査員らも調査に協力してくれた。

(2) 発見した遺構

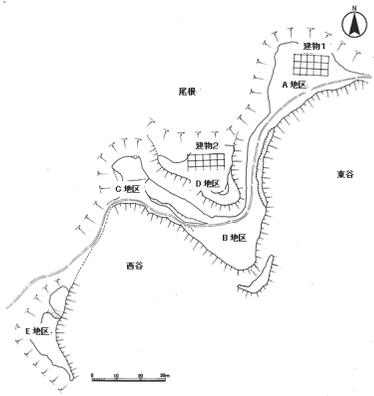
遺跡は如意ヶ嶽南側山腹の標高四〇〇メートル付近にあって、中央の尾根部を二段に削平して両側の谷部を埋めて造成、大きく五箇所(A〜E)の堂宇跡を示す平坦地があり、地形測量の結果、遺跡の範



檜尾古寺の想像復元図（南から）



薄暗い樹下で礎石を探す部員たち



檜尾古寺跡平面実測図

側で見つかった建物跡は、礎石建ち東西桁五間（十尺等間で一五メートル）、南北梁間は二間（四・八メートル）のみを確認したが、三または四間規模の南面する建物とみられ、両建物は付近からの瓦の発見数が少ないことから檜皮葺屋

囲は東西約一四〇メートル、南北約一三〇メートルであることが判明した。

堂宇があったとみられる平坦地だけでも、合計面積は約二、〇〇〇平方メートル、その内二箇所から建物跡を確認、東側のA地区の建物跡は、南面する礎石建ち五×三間（一四・四メートル×八・一メートル）で建築面積は一一六・六平方メートル、中央尾根上のD地区北

根であったと考えられる。

そのほかB・C・E地区の平坦地にも堂宇があったと考えられるが、発掘調査ではないため、それ以上の建物跡の確認はできなかった。

(3) 発見した遺物

遺跡から発見した遺物はコンテナ二箱分（五〇〇点以上）あり、大半が表面採集品である。軒丸・軒平瓦や平・丸瓦のほか、須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・土師器、そのほか鉄釘、鉄楔、壁土などがあり、大半が平安時代前期の遺物である。

特に注目される遺物として、当時では最高級の尾張の猿投窯産緑釉陶器⁽¹²⁾があり、東方のA地区の建物跡からは、漆に金箔を貼った漆箔の塑像片⁽¹³⁾が多数見つかった。

塑像は奈良時代の天平期には大和を中心に数多く作られたが京都で見つかることは珍しく、太秦の広隆寺旧境内や山背国の北域では最古の北野廃寺など、これまで平安京遷都前に創建されていた寺院でしか見つかっておらず、漆箔は初めての発見である。



緑釉陶器片（碗）



漆箔の塑像の破片

そのほか、軒先瓦は洛北の芝本瓦窯産とみられ、遅くとも九世紀初めには開窯したとされる造瓦所⁽¹⁴⁾の製品で、嵯峨天皇の後院

であった冷然院創建時の所用瓦とされる。⁽¹⁵⁾

これらの発見遺物から想定される時代は、発掘調査でないため明確にはできないが、少なくとも九世紀前半中頃には寺が創建され、僅かであるが焼けた痕跡の瓦や十世紀後半代の土師器の存在から、その頃に火災に遭って廃絶し、そのまま埋もれてしまったと推定される。

これらの発見遺物は、平安時代前期に属するものが大半で、当初推定していた南北朝期の古絵図に描かれた如意寺の大慈院跡ではないことが明らかとなった。

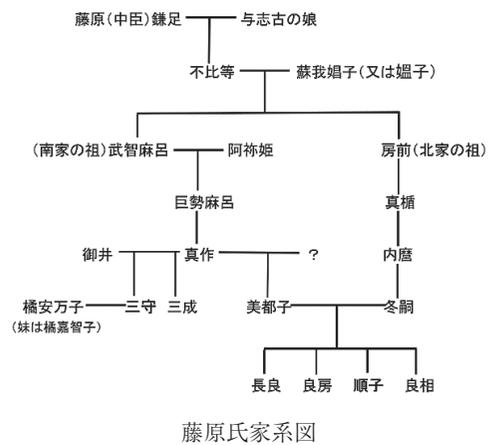
その結果、この遺跡は安祥寺上寺の北方約六〇〇メートルの山中に位置し、アクセスルートも山科方面からとみられ、発見遺物の年代観からも資財帳に記載された檜尾古寺跡であると判断した。

(4) 檜尾古寺の創建者についての考察

紙面の関係で安祥寺の調査成果には触れないが、九世紀中頃、天皇家の創建に関わる安祥寺上寺創建より前に、その北方約六〇〇メートルの山中に存在していた檜尾古寺は、いったい誰が創建に関わったのであろうか。

平安京遷都から間もない九世紀前半代、都に近い山岳域において大規模な造成工事を行い、少なくとも四棟以上の堂宇を建立、平安京跡でも出土例が僅少な高級陶器や漆箔の塑像の存在など、相当な地位や財力のある人物にしか創建に関われない条件が揃っており、しかも、九世紀の初めに空海が唐から密教を我が国に伝えてから間もない頃に創建されたと考えられる山林寺院である。

残念ながら文献史料上では資財帳にしか寺院名の記載がなく、願主



藤原氏家系図

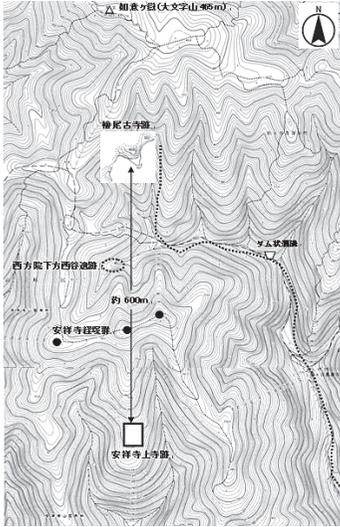
作の五男、左大臣藤原武智麻呂の曾孫で巨勢麻呂の孫にあたり、官位は従二位、右大臣、贈従一位で後山科大臣と号し、嵯峨天皇に近従し重用されて活躍した人物である。

三守は、弘仁十三年（八二二）六月十一日の延暦寺（比叡山寺・一乗止観院）の大乗戒壇設立に力を尽くし、弘仁十四年（八二三）四月十四日の嵯峨天皇筆『光定戒牒』（国宝）に別当と記載されるなど、天台（台密）との関係が深く、また嵯峨天皇との関係から空海との親交もあって、天長五年（八二八）十二月十五日には、三守の平安京の自邸（平安京左京九条二坊十一・十四町）二町を空海に寄進し、空海は綜芸種智院を創設（『綜芸種智院式并序』）しているなど、外護檀越として真言（東密）との関係もあって、仏教に対して信仰も厚く理解のある人物と考えられる。⁽¹⁶⁾

三守の室である橋安万子（典侍、従四位下）は、弘仁八年（八一

や開基などを推定するのは極めて困難である。そのような条件下であるが、願主の有力候補の一人に藤原三守（七八五〜八四〇）が挙げられる。ここでは『公卿補任』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本紀略』などの史料を参考に考察してみたい。

藤原南家の三守は藤原真



両寺の位置と推定アクセス図

七) 六月十四日に死去、彼女は嵯峨天皇皇后で、壇林寺を創建し檀林皇后と呼ばれた橘嘉智子(七八六〜八五〇)の姉であり、嵯峨天皇に重用されたことで、同じ宮中における上級女官として夫の三守を支えたとみられる。

その十一年後の天長五年(八二八)九月五日には、嵯峨朝で内侍を務めた異母姉の藤原美都子(左大臣藤原冬嗣の室で子に長良・良房・順子・良相らがいる)が死去。同年に三守は先述の平安京の自邸を空海に寄進したほか、淳和天皇の要請を受けて正三位・大納言に昇進している。それから二年後の天長七年(八三〇)四月三十日には、実弟の藤原三成を四十五歳で亡くしている。

そのような中で、同年十月七日には、藤原冬嗣、藤原葛野麻呂、秋篠安人らと嵯峨朝から引き継いで修訂が進められていた『弘仁格式』を撰上(同年十一月十七日に施行)しており、三守は編纂の重責から解放されている。

このような経緯の中で、仏教を厚く信仰していた三守は、この頃までの重なる身内の不幸などから世の無常を感じ、先に自邸を空海に寄進した経緯を含めて、平安京に近い山岳域に山林寺院の創建を発願したと考えてもおかしくない。

その後、三守

は承和五年(八三八)には右大臣に昇進、承和七年(八四〇)七月七日に五十六歳で薨御、右大臣従二位皇太子傳で即日従一位が追贈されている。

三守は別名を後山科大臣と号しているが、山科は天智天皇の重臣で藤原氏の祖である中臣鎌足(没後、天智天皇から藤原姓を賜う)の陶原館⁽¹⁷⁾があつた場所であり、天智天皇山科陵(御廟野古墳)も存在する。鎌足の死後、室の鏡女王が造仏を安置して山階寺(山階精舎、釈迦三尊像・四天王像があつた)となり、やがて飛鳥の厩坂寺を経て、平城京遷都に伴い興福寺へ繋がっていくとされ、山科は藤原氏にとって始祖所縁の土地でもある。

その後、三守の異母姉(美都子)の子で姪に当たる藤原順子(藤原北家)がその経緯を知って、九世紀中頃、伯父の三守が建立した山林寺院の南方、同じ山科北方山中に寺院建立を思い立ち、資財帳に記載されるとおり太皇太后並びに四恩の為に嘉祥元年(八四八)八月に安祥寺上寺を創建、さらに斉衡三年(八五六)十月には、北方にあつた檜尾古寺に隣接する南側の土地五十町(約五九四、〇〇〇平方メートル)を買い上げ、安祥寺に施入したのではないか。

そのほか、三守の曾祖父に当たる藤原武智麻呂については、漢詩集『懐風藻(七五一年頃成立)』に、天平十七年(七四五)九月に近江守に任ぜられた藤原仲麻呂の「比叡山の先考(亡父の藤原武智麻呂)のものとの禅処(禅を修業する処、禅房)にあつた柳の木を詠んだ」作に、麻田連陽春が和した詩に「近江は惟れ帝里、裨叙は寔に神山、山静けくして俗塵寂み、谷間けくして眞理専にあり、於穆しき我が先考、獨り悟りて芳縁を闡く、寶殿空に臨みて構へ、梵鐘風に入りて傳ふ、

云々」とし、武智麻呂が俗塵を離れた神山（比叡山）に宝殿を建てて修行に勤しんでいたことを記しており、その場所は不明ながら、三守は曾祖父に習って比叡山や平安京の近く、藤原氏所縁の地である山科北方山中を選んで、仏堂の建立を発願した可能性も考えられないだろうか。なお、この寺院が資財帳に「北隈檜尾古寺所」と記されることについては、檜の生えた尾根に寺が存在し、「所」は所有地（境内地）を示すもので、「古」は単に古いと解釈するより安祥寺より前にあった寺を意味するものと解釈している。

以上、取り留めもなく藤原三守がこの山林寺院を建立した可能性のあることを書いたが、創建にかかる願主が三守であると書かれた史料は見当たらず、これはあくまでも筆者の勝手な推論ではないこととお断りしておきたい。

3 おわりに



2019年の調査参加者

これまでの調査成果は、新聞各紙にも何回か掲載され、二〇一九年一月十五日には部員たちがフジテレビの取材を受け、翌朝の情報番組「めざましテレビ」を通して全国へ報道された。さらに、学生たちの協力で、京都市考古資料館において二〇一九年一月五日～二月十七日まで「新発見考古展―檜尾古寺跡調査成果―」を開催、同館にて学生たちによる一般市民への説明会も開催した。



テレビ局のインタビュー



京都市考古資料館の展示



平安京創生館の展示

その後、京都アスニーの平安京創生館で企画展「平安京周辺の山林寺院」を二〇一九年十二月十四日～二〇二〇年五月二十九日まで開催、そのほか、二〇一九年秋の藤花祭でも企画展を開催し、部員たちには学芸員の實務も経験させることができた。

二〇一七年から三年間の調査成果をまとめた報告書は、勉学に多忙な三回生に校正を手伝ってもらって二〇一九年八月に上梓する⁽²⁰⁾ことができ、調査関係者や関係機関、市内の大学の考古クラブ、図書館などに幅広く配布することができた。

これまで調査を遂行できたのは、探究心溢れる学生諸君の協力と努力のお陰であるが、山岳域に残る遺跡はアクセスも厳しく常に危険が伴い、もちろん便益施設も無く、アリや蚊などの昆虫に悩まされ、時には鹿や猪などが出没する女子大生には最悪の環境での調査であった。お粗末ながら調査費は無く、すべて部員の手弁当の調査で、道なき山中での草刈り、雑木や草をかき分け、慣れない測量器具や道具を使つての測量、発見礎石の清掃や山中での遺物探しなど、大汗、冷汗をかきながら調査を進めた。



2018年の夏合宿を終えて



発掘のプロも調査に協力



林の中で休憩

また、合宿では慣れない共同生活の中で、食料品の買い出しや夕飯の支度は、現地調査で疲れて帰ってから部員が交代で行ったが、彼女たちは不平も言わずによく耐え、毎年合宿恒例の花火大会やスイカ割などにも興じ、部員同士の親睦をさらに深めることもできた。

調査は発掘でないため物足りなさもあったが、当初の予想以上の成果が生まれ、現場での調査活動のほか、遺物整理や報告書の作成、公施設での本格的な展示作業や市民への解説、マスコミ対応、報告書の校正や出版など、通常の学生生活では経験できない多くのことを学生たちに体験させることができた。

当初は筆者の個人的な遺跡への興味から始めた調査であったが、勤勉でまじめな彼女たちの力を借りなければ成果は上げられなかったし、調査を通して彼女たちの持つ潜在的なポテンシャルに改めて気づかされた次第である。

遺跡から歴史を紐解いていくという実践と学びの経験が、彼女たちの大学時代のエポックとして記憶に刻まれ、これから社会に出てもその経験を是非生かして欲しいと願うばかりである。

末尾に、檜尾古寺跡の調査に参加してくれた考古研の部員たちの氏名を記し感謝としたい。

- 安藤萌望・石崎茉莉・植村沙彩・梅野沙織・大塚美紀・勝部雛子・小嶋理紗子・佐伯綾音・坂根早織・佐々木彰子・新開悠・谷祐希・辻野彩華・常見紗椰・林亜利紗・日紫喜史奈・菱田侖里・樋上瑞希・本間日南子・牧野千里・宮本麻菜・武藤真由・横関美咲・和田幸奈・渡邊美美奈。
- (あいうえお順)

註

- (1) 京都市文化市民局編『京都市遺跡地図』、如意ヶ嶽周辺山域には、平安時代の如意寺跡、安祥寺上寺跡・浄土寺七廻り町遺跡・如意ヶ嶽経塚、戦国期の如意ヶ嶽城跡・中尾城跡・東山岩倉城跡・灰山城跡など多くの遺跡が点在している。(遺跡地図はネットで配信)
- (2) 中町美香子・鎌田元一『安祥寺資財帳』、京都大学史料叢書17、京都大学文学部日本史研究室、二〇一〇年。『安祥寺伽藍縁起資財帳』ともいう。観智院旧蔵本(重要文化財、京都大学文学研究科図書館蔵)。
- (3) 梶川敏夫『山岳寺院』、『平安京提要』、(財)古代学協会、一九九四年。
- (4) 上原真人・梶川敏夫ほか『安祥寺の研究Ⅰ—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院』、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム、『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』成果報告、二〇〇四年ほか。
- (5) 上田進城『山科安祥寺誌』、安祥寺刊、一九二九年。
- (6) 八賀 晋『安祥寺上寺跡』、『学叢』第三号、京都国立博物館、一九八一年。
- (7) 註(3)に同じ。
- (8) 京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』。21世紀COEプログラム

(Century of Excellence Program) とは、二〇〇二年度から文部科学省の研究拠点形成等補助金事業として日本学術振興会に設置されたもので、委員会の審査により補助金交付先の審査、評価が行われる。日本の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界を先導する創造的な人材育成を図ることを目的とし、京都大学の第14研究会「王権とモニユメント」と題して調査研究が行われた。

(9) 註(2)(3)のほか、根立研介・五十川伸矢ほか『安祥寺の研究Ⅱ—京都山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』、二〇〇六年京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』事業実施委員会、二〇〇七年。上原真人・梶川敏夫ほか『皇太后の山寺—山科区安祥寺の創建と古代山林寺院—』、柳原出版、二〇〇七年ほか、いくつかの論文や報告書が出版された。

(10) 如意寺跡に関しては、梶川敏夫「如意寺跡発見への挑み」『園城寺』第56・57・58号、園城寺、一九八六・一九八七年。上山春平『古代文化』特集「如意寺の諸問題」掲載の梶川敏夫「如意寺跡—平安時代創建の山岳寺院—」。家崎孝治・鈴木久男・梶川敏夫「如意寺跡発見遺物」。木村捷三郎「如意寺跡発見遺瓦」、(財)古代学協会、第43巻、第6号、一九九一年などがある。

(11) 梶川敏夫「鹿のおかげで見つかった幻の密教寺院」、『文藝春秋』第96巻第三号、二〇一八年。

(12) 猿投窯とは日本三大古窯のひとつで、愛知県名古屋市東部付近一帯に古墳時代から鎌倉時代初期まで焼き物を生産し、特に平安時代前期には高級な緑釉陶器が焼かれ、平安京へ運ばれた。平安京では嵯峨天皇の後院である冷然院や、右大臣藤原良相邸である西三条院など皇室関係や高級貴族の邸宅跡から出土している。

(13) 塑像片は、京都芸術大学(京都造形芸術大学)歴史遺産学科教授の岡田文男氏に分析をお願いし、漆に金箔を貼った漆箔の塑像であることが判明した。

(14) 網伸也「平安宮造営と瓦生産」『平安京造営と古代律令国家』所

収、二〇一一年。芝本瓦窯の創業は、同産軒瓦が平城京東三坊大路で出土しており、大同四年(八〇九)から弘仁元年(八一〇)の平城上皇による平城宮の再整備段階以前には創業していたと考えられている。

(15) 『平成27年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書—平安京左京二条二坊「冷然(泉)院」出土品—』、京都市文化市民局、二〇一六年。

(16) 空海と三守及び最澄との関係については、西本昌弘「藤原三守の経歴と空海との接点」『空海と弘仁帝の時代』、塙書房、二〇二〇年二月に詳しく述べられている。

(17) 『興福寺縁起流記資財帳』、『宝字記』、天平宝字年間(七五七〜七六五)。吉川真司「近江京・平安京と山科—古代の山科—」『皇太后の山寺—山科区安祥寺の創建と古代山林寺院—』、柳原出版、二〇〇七年に詳しい。山階寺(陶原館)のあった場所はJR山科駅西南の現在の京都薬科大学付近と推定されている。

(18) 吉川真司「安祥寺以前—山階寺に関する試論—」『安祥寺の研究Ⅰ—京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院—』、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』成果報告、二〇〇四年。「近江京・平安京と山科」『皇太后の山寺—山科区安祥寺の創建と古代山林寺院—』、柳原出版、二〇〇七年。

(19) 『文徳実録』嘉祥三年(八五〇)三月二十七日条に、仁明天皇崩御後の御初七日にあたり、近隣七箇寺(紀伊寺・寶皇寺・來定寺・拝志寺・深草寺・眞木尾寺・檜尾寺)に使が遣わされており、「檜尾寺」という寺が仁明天皇の御陵(現在の御陵は不確定)のある深草の近くにあったことが分かる。史料の注釈には「檜尾寺 字類抄、法禪寺之也、實惠僧都居住所也」とあり、空海十大弟子の一人、実惠(上足実惠大徳…七八六〜八四七)は、深草の法禪寺に退隠して「檜尾僧都」とも呼ばれ、檜尾寺は一名法禪寺と呼ばれていたとされる。この「檜尾寺」とは、「法禪院 檜尾」とある深草の檜尾という所の地名を冠した寺と考えられ、地名は現在まで伝わっており

ず、ヒノキの生えた山裾にあった寺を指すとみられる。京都市遺跡
地図のオウセンドウ廃寺がその寺跡と考えられ、今回の「檜尾古寺
所」とは別の寺院と解釈している。

(20) 京都女子大学考古学研究会編『檜尾古寺跡―京都東山如意ヶ嶽山
中の平安時代前期山林寺院―』、二〇一九年。